

21世紀 COE プログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」
第4回「言語・脳・認知」国際学術フォーラム

去る9月12日、13日、川内北キャンパスマルチメディア教育研究棟2階ホールにおいて、東北大学21世紀COEプログラム（人文科学）「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」主催による第4回「言語・脳・認知」国際学術フォーラム『認知・脳・類型論：融合に向けて』が開催されました。本フォーラムは、6月に開催された本COE第3回フォーラム（東北大学ケンブリッジフォーラムの一環として開催）に次ぐ第4回目の「言語・脳・認知」国際学術フォーラムとなります。2日間にわたって開催された今回のフォーラムには、本COEプログラムの関係教員、大学院生の他、岩手大学、盛岡大学、山形大学、東北学院大学、東北福祉大学、宮城学院女子大学、福島大学、東京大学、お茶の水大学、金沢大学、ペンシルベニア大学などの教員、学生、一般の方々を含む、延べ200名を超える参加がありました。



（William Croft 教授の講演風景）

今回のフォーラムでは、テーマを「認知・脳・類型論：融合に向けて」と定め、ことばの理解、産出にかかわる脳内の活動が、言語間の構造的な距離、言語のタイプの違いによってどのように影響を受けているか、といった、脳の中のことばの働きを探る脳科学的研究と言語の構造的な類型（タイプ）の言語学的研究の融合を図る研究発表

が行われました。今回のフォーラムの特徴は、本COEに参加している博士課程学生の研究成果の発表を中心としたプログラムであったことです。一日目は、言語と工学・心理学・脳科学の学際領域を中心とした発表が行なわれ、二日目は、主に言語学（生成論・類型論）・認知言語学を中心とした発表が行われました。さらに、これらの学生の研究発表に加えてオランダ、韓国、イギリスなど国外からの研究者による基調講演、招聘講演もあわせて行ないました。



（南 基春教授の講演風景）

一日目は、本COE拠点リーダーの堀江薫教授からの開会の挨拶に始まり、次に教員及び大学院学生の研究発表、その後、オランダ・マックスプランク心理言語学研究所のAsifa Majid博士（心理学）の「The human body in cognition, brain, and typology」、韓国・高麗大学の南基春教授（心理言語学）の「Lexical and sublexical representation in visual word recognition」の招聘講演という流れで発表が進行しました。また、一日目の最後の講演として、オランダ・マックスプランク心理言語学研究所のMelissa Bowerman教授（社会心理学）が「Event categorization in language and cognition: The case of “Cutting and Breaking”」と題し、基調講演を

行いました。二日目は、一日目同様、最初に教員及び大学院生の研究発表があった後、韓国・嶺南大学の李光五教授（行動科学）の「Morphological representation and processing of Sino-Korean words」、東北大学国際文化研究科 Heiko Narrog 博士（言語学）の「Getting on the modality ladder: Event-oriented modal markers between voice and modality」の招聘

講演がありました。その後、イギリス・マンチェスター大学 William Croft 教授（言語学）が「Multidimensional scaling for typological analysis and its implications for typology, cognition and the brain」と題して、基調講演を行い、最後に本 COE 事業推進担当者・国際文化研究科の佐藤滋教授からの閉会の挨拶をもって本フォーラムを終了いたしました。

（国際文化研究科）